

科 の 動 き

一九五七年度の歩み

□本年度を顧みて、文学部所属変更が実現した事は、当学科にとつて最大の喜びの一つであった。しかしここに至るまでには、カリキュラム充実のための委員会をつくり、六月より夏休暇にも会を重ね、十二月まで及んだのである。

□これに関連して、本本学科附属施設のあり方につき、研究室員により、松島先生を中心に研究会を毎水曜に開いた。昨年度から引続き、本年度の数回の会をもつて、その構想の一部をパンフレットにし、一刻も早く施設の実現をのぞみつつ関係者へ配布の運びとなつた。三月八日には、セツルメント建設募金音楽会が新制八回生主催で行われた。

□又、昨年度にひきつづき、日本社会福祉学会関東部会の当番校として、三カ月に一回の研究例会、関東部会総会を本学に於いて開催。十月の日本社会福祉学会には、明治学院大学に於いて、松本「ゴールドン・ハミルトンのソーシャルケースワークにおける行績」を、一番ヶ瀬「明治期の東京市における下層社会の変貌過程」を特別研究報告として発表。更に学会の共同研究「ボーダーライン層に関する研究」に参加し研究している。

□その他、十月全国社会福祉事業大会研究発表会で、松本、四年生が研究発表を、十一月日本プロテスタント史研究会では、一番ヶ瀬「成瀬仁蔵について」を発表した。北大にての日本社会学会には篠崎出席。

□今年度から、現場実習委員会（学内現場実習担当者三名、学外施設より三名）をつくりより一そう学生のために、実習先の拡充協力強化をはかった。尚四年の二期にわたる実習終了後の十一月二十八日には、各施設のスーパーバイザーと学生、研究室員との懇談会を開催、来年度へのより進歩を願いつつなごやかな雰囲気の中に会を閉じた。

□一方、夏休暇には、学生奉仕団のセミナーに、肢体不自由児童育キャンパルのリーダーに他施設の活動に、冬期休暇には山梨県の清里農村センターに、ヴォランティアとして学生有志、研究室も参加した。又当学科の子供会活動も新活動場所をもつ事が出来た。

□十二月末には、来年度新たに教授として迎える松尾均先生を囲み、研究室員との懇談打合せをもつた。以上の様に、年々学生の成長と共に、研究室においても学内に、研究に、活動に、拡充の歩を進めている。

一九五七年の主な出来事

四月十七日	学科附属施設のあり方につき研究会を始む（研究室）以後数回に及ぶ
六月二十五日	現場実習委員会開く（研究室）
六月二十六日	学科カリキュラム委員会第一回開く、以後数回に及ぶ（研究室）
七月八日	二週間の前期現場実習開始（学生）
十一月十一日	二週間の後期現場実習開始（学生）
十一月二十八日	現場実習終了後実習先のスーパーバイザーとの懇談会を泉会館にて開催（学生、研究室）
十二月十二日	来年度自治計画に関する縦の会開く（学生）
十二月二十一日	来年度新たに迎える松尾均教授を囲んでの懇談会（研究室）
三月八日	新制八回生主催、セツルメント建設募金音楽会を杉並公会堂にて開催

文学部へ所属変更について

久しい以前から本学科では研究室、卒業生、在校生の共通の願いとて、本学科を学部として独立させるか、又は文学部所属として学問体系上その性格を明確にし、又学士号を家政学士から社会学士に変更したいと望まれていた。

この願いが本年度五日から具体化し、従来科内で度々検討してきた理想案を再検討し、又、六月二六日、学長任命の特別委員会及び講師の一部、それに一般教育課程社会科学系列から一部の講師が加わつた。委員会はその後数回、暑中休暇にかけて開かれ、熱心な検討が続けられた。社会福祉学科の理想の形態は如何なるものであるか、殊に日本という社会環境において、という立場から、従来科の形にとらわれず、新しい構想の下に研究が進められた。

外国及び国内社会事業関係大学のカリキュラムを参考にし、委員各自それぞれの理想案をもとに自然的論議がたたかわされた事もある。その結果、現状では独立学部の創設は経済的に不可能故、文学部社会福祉学科とすること、学士号は社会学士とすること、従来家政学部共通必修課目として履修した単位は不足だった基礎学たる社会科学の充実及び、今までおかれていなかった専門課目、コミニティオーガゼーション等にふりむけること、等々が決定した。

その後九・十月にわたり家政学部及び全学教授会が開かれ、此の問題を議したが、大多数の教授より、温い理解と支援の言葉が述べられ議決された。

その後理事会を経て、本学科の文学部への所属変更を学期変更の形式で文部省に届出、十二月に承認を得、学士号は社会学士と決つた。実施は昭和三三年度となり、ここに永年の希望の実現をみたのである。

編集後記

○第五号も皆々様の御協力、とりわけ卒業生の方の御援助によりまして、やつと発刊することが出来ました。御寄稿下さいました卒業生の方々に對し、心から感謝いたしております。お忙しい現場の中での御執筆は、どんなにか大変でいらつしやいましたでしょう。しかし、後輩は、御一人御一人の貴重な御発表で、どれだけ勇気づけられるかわかりません。今後ともよろしくお願いいたします。

○菅科長の巻頭のことばや、科の動きに書いてあるごとく、今年度はいろいろな意味で私達の科にとり、忘れることの出来ない年だと思ひます。

○いろいろな願いや祈りをこめて、第六号もより充実したものにすべく考えております。御批判、御意見を是非およせ下さいませ。

○この度も、表紙は、又々四三回生高村様の御主人から御寄贈いただきました。